

## 編集にたずさわって

本城正一

(北星堂書店編集部長)

今回の『ワイルド事典』の刊行に際しましては、執筆にたずさわられた関係者の方々、そして編集委員の方々に厚く御礼申し上げます。先日、大学時代の恩師からお電話があり、「君が北星堂に入って初めての快挙だ、おめでとう」とおほめの（だと素直に受け取っておりますが）言葉をいただきました。

昨年とはとにかく多忙を極め、ワイルドを右手に、弓手にその他もろもろ、ワイルドの最終段階でも、やれ英検だトイックだ時事英語だなんだかんだ……行き届かなかった点多々あったことだろうと思えますと、不安でもあります。私もよく夢を見る方ですが、このワイルド関係の仕事の夢を（途中ワイルド本人まで出てきたりしましたが）、210日間ぶっ続けて見たことも今では懐かしいほど——おかげで先般公開の映画（ブライアン・ギルバート監督『オスカー・ワイルド』）がよく理解できたのには我ながら驚きました。

私が本書に関わりましたのは、第1次の原稿をお預かりしてからということになります。全部そろってない、字数制限無視、表記バラバラ、文献も索引もあったりなかったり、多すぎたり少なすぎたり、図版はどーなる……面倒なことは後回し、とりあえず見切り発車！

### 途中のお言葉（敬称略）

荒井：（当方の進行が思わしくなく、概）僕はもうやる気をなくしましたよ。

追い込みの段階で

佐々木：僕に絶対回ってくると思ってましたよ。

山田：俺を無視しとるだろう。（〈伝説〉の新宿滝沢の緊急ミーティングにご一緒できればよかったんですが）

事実とはかく、もったいなくも、沈没しかかった舟を救ったのは私だとおっしゃって下さった川崎先生のお言葉は身に余る光栄です。とにかく、座談会の席でも申しました通り、「墓場まで持っていける」本の製作にたずさわれたことは編集者冥利に尽きるといっても過言ではありません。あらためて御礼申し上げますとともに、協会のますますのご発展をお祈りいたします。